土岐市教育研究所
ＴＥＬ　0572-54-1111（内373）
ＦＡＸ　0572-55-6310
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ　kyoiku@city.toki.lg.jp
所報　Ｎｏ．５６７
発行責任者　所長　河合　広映
発行日　令和５年１月　２４日
題字　山田恭正　教育長

『地域との関わり』

～地元の製陶所さんの
タイルでリース作り～

撮影　西部こども園
三宅　淳子　副園長先生

ドーハの歓喜

土岐市教育研究所長　河合　広映

令和４年１２月２日（金）朝、サッカー日本代表がスペインを２－１で破り、決勝トーナメント進出を決めました。朝４時からのキックオフを多くの人たちが観戦したといわれています。決勝トーナメントではクロアチアに惜敗し、日本は悲願のベスト８には進むことができず、新たな扉を開けることはできませんでしたが、大きな感動を日本中に与えたことは間違いないでしょう。すでに、ワールドカップはアルゼンチンの優勝で幕を閉じ、この熱量や歓喜は過去のものとなっています。初戦でドイツを破り、日本中が歓喜の渦に包まれた数日後、まさかのコスタリカ戦での敗戦。誰もが、意気消沈して「スペインには・・・」と思っていた中での勝利。決勝進出を願いながらもどこかであきらめムードも漂っていました。しかし、世間からの非難を受けて誰よりも敗戦を悔しがり、次戦の準備をしていたのは、まぎれもない日本代表のメンバーたちです。日本中を笑顔にしてくれた彼らには感謝しかありません。これだけ、日本中を一つにして、職場での朝の挨拶が「試合みた？日本勝ったよね。すごかったね。」になるワールドカップは、コロナ等による国民の曇天の胸の中をスカッと明るくしてくれました。

ある問題に遭遇したときの対処の方法には二つの方法があるといいます。一つは、原因追究志向、もう一つは解決探索志向です。一つ目の原因追究志向は、「問題に焦点を当てる」方法です。「なぜ、上手くいかないのか？」を考えて、その原因を探していきます。二つ目の解決探索志向は「解決に焦点を当てる」方法です。「なぜ、上手くいかないのか？」は横に置いておいて、「どうやったら上手くいくのか？」を考えます。日本代表がコスタリカ戦に敗れた時、ネット上は「なぜ、上手くいかなかったのか？」であふれかえりました。「〇〇選手を投入する時間帯が遅すぎた。」とか「なぜ、〇〇選手を使わなかったのか？」など。でも、これだけでは解決はしません。原因追究だけでは、粗を探すだけになってしまいます。「・・・していたら」「・・・・していれば」の「たられば」だけでは解決策は見つからないのです。そこから「解決探索志向」という発想の転換をしていくことが大切です。

こんな話があります。「エレベーターの待ち時間が長すぎる。何とかしてほしい。改善しなければ、このビルから出ていく。」こんなクレームがオフィスビルに入っているテナントから上がってきました。解決策として話し合われたのは「エレベーターを増設すること」や「高速の最新型エレベーターに取り換えること」でした。どれも莫大なコストがかかり頭を悩ませていました。そんな時、ある社員が「・・・・・・・・・・・」と提案をしました。今あるエレベーターを増やしたり、取り替えたりすることなく、この問題は解決することとなったのです。一体、どんな解決方法だったのでしょうか。問題は、「エレベーターの待ち時間が長い」ことです。発想の転換をしてみてください。「長いと感じる」ことを解決する方法です。実は、解決方法は、「エレベーターの前に大きな鏡を置いた」というものです。鏡を置いた結果、人々はエレベーターを待っている時間に鏡を見ながら服装や表情、化粧の状態をチェックするようになったので、待ち時間を長いと感じなくなったということです。「エレベーターと鏡」というお話です。

気持ちを強くもつことだけでは、スペイン戦の勝利はなかったはずです。コスタリカ戦の敗戦から森保監督はどんな原因追究志向から解決探索志向へ転換したのでしょうか。一度、聞いてみたいものです。

３月には、ワールドベースボールクラシックが開催されます。今度は、野球の日本代表が日の丸を背負い世界の舞台での活躍が期待されます。栗山監督の手腕が楽しみです。

【校長室の窓から】

肥田中 かがやくみらい

肥田中で学ぶ生徒たちには「かがやくみらい」が広がっている

肥田中学校長
加藤 充康

１　肥田中学校として大切にしたいこと

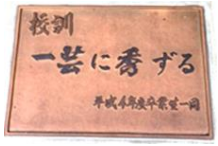
（１）「『主体性』を鍛え、『社会性』を磨く」

肥田中学校では、生徒と教師の共通のスローガンとして、「『主体性』を鍛え、『社会性』を磨く」ことを掲げ、日々取り組んでいます。「主体性」とは「自分から動く」こと、「社会性」とは「世のため人のために力を尽くす」こととして、学校生活において自分から動いて取り組む姿、地域行事やボランティア活動に参加して地域に貢献する姿を価値付けてきました。

（２）肥田中の強みと課題、改善の方途

令和３年度の１２月に、肥田中の強みと課題をテーマとして「肥田中ハッピーミーティング」を行いました。強みは「自己肯定感が高い」ことであり、課題は「自己表現力・発信力の弱さ」であることを確認しました。そして、課題を克服するために「これからやるとよいこと」等についても意見を出し合いました。職員全員で肥田中の未来について考え、交流できたことは、とても有意義なことだと感じています。出された意見等については、令和４年度の教育課程にできる限り取り入れ、改善を図るようにしました。

（３）校訓「一芸に秀ずる」の再位置付け



令和４年度は、かつて校訓であった「一芸に秀ずる」について、学校経営構想の中で７年ぶりに再位置付けしました。「一芸に秀ずる」とは「得意を生かす」ことだと捉え、課題である「自己表現力・発信力の弱さ」は、「一芸」を披露・交流していくことで、克服につなげられるのではないかと考えたからです。

２　「自己表現力・発信力」の向上を目指して

「自己表現力・発信力」の向上を目指して、令和４年度に取り組んでいることについて紹介します。

（1）「Ｇｏｔ　Ｔａｌｅｎｔ　ｉｎ　Ｈｉｄａ（略してＧＴＨ）」の開催

一芸披露交流会として生徒会が主催し、８月末に開催しました。自分の持ち味・得意は何かを考え、表現につなげられるようにしました。笑いあり、涙ありの素敵な時間となりました。

（２）対話的な活動の意図的な位置付け

肥田中学校区の研究主題「どの子もわかる、できる、深まる授業づくり　～対話的な活動を通して～」　　と関わらせ、授業や様々な場面において、目的や意図を明確にした対話的な活動を位置付けています。

（３）「いじめ」や「多文化共生」について考える全校道徳の実施

昨年度に改定した「肥田中学校人権宣言」の条文を重点として教育課程に位置付け、前期・後期に全校道徳を実施しました。前期の重点「いじめについて考える：人権宣言第６条」、後期の重点「多文化共生について考える：人権宣言第２条」としました。道徳を受け、各学級で宣言（大切にしたいこと）を考え、全校に発信しています。

（４）タブレットを使って発信

授業において、タブレットを十二分に活用し、考え等を積極的に発信できるような活動を位置付けています。「新ＡＬＴへの自己紹介」「おすすめ本紹介」「生徒会選挙の公約提示」等、道具として使いこなす生徒が増えてきました。

（５）２年生において「ドリームマップ」を作成

肥田小・中学校運営協議会にて策定した「ひだっ子ゆめプラン」に基づき、２年生において「ドリームマップ」を作成しました。１０年後の自分の姿をイメージし、学級で共有することで、夢の実現に向けた歩み出しにつなげています。

３　「かがやくみらい」が広がる肥田中

> 「今の自分にできることで、自分の価値を判断しちゃいかん。五年後の自分の可能性を舐めるなよ」
> （『スタートライン』喜多川泰）

肥田中の生徒たちが「かがやくみらい」をつかめるように、これからもできることを精一杯やっていきます。

【幼稚園教育の紹介】

『遊びを通して発達の基礎を培う』

妻木小学校附属幼稚園　　園長　伊藤　策雄

１　幼稚園教育で大切にしていること

今年度から幼稚園に勤務し感じていることは、園児たちの意欲的でやる気に満ちた姿である。それを支えているのが、教師の季節や発達段階、幼児の思いを大切にした環境構成の工夫と丁寧な支援である。

幼稚園教育は、幼児の自発的な活動としての「遊び」を発達の基礎を培う重要な学習であるとして、「環境を通して行う教育」を基本としている。子ども一人一人がもっている自ら学ぼうとする力を何よりも大切にし、子どもが目を輝かせて、喜びに突き動かされて、夢中になって遊ぶ姿を目指し、教育的価値をもった環境によって引き出したいと考えている。また、各園の校内研究を通してのめざす姿、その遊びにおけるねらいや付けたい力をしっかりともって取り組むようにしている。

２　主体的な活動を生み出す環境構成

① 子どもの発達や、興味や関心に沿って教材となるものを見出す

② 子どもの活動の発展を予測しながらの支援（子どもに身に付けさせたい資質や能力、子どもの姿を思い描きながらの場を設定）

③ 活動に寄り添いながら、発想を広げたり、新たな発想を引き出したりする助言・評価

３　妻木幼稚園での実践を通して

◇異年齢遊び「お店屋さんごっこ遊び」

【異年齢活動のねらい】

・５歳児は、活動をリードし、年下の子のことを気遣い、関わり合いながら対話や制作を楽しむ。

・３、４歳児は、５歳児を真似したり、思いを伝えたりしながら活動を楽しむ。

【園の研究「進んで表現する子」との関わり】

「お店屋さんごっこ」を設定した背景

① 言葉でのやり取りを通した表現力の育成が図られる。

② 身近にある「食べ物屋さん」にすることで、３、４歳児にもイメージをもたせたり、考えの表現をしやすくさせたりして、より満足感や達成感を感じながら表現力を高められる。

③ 経験を活かして、互いにアイデアを出しながらお店屋さんごっこの工夫ができる。

④ お客さんとお店屋さんという立場でのやりとりをすることにより対話を楽しめる。

主体的・対話的で深い学びを成立していく過程で、必要な環境構成を整えていくことにより、次のような姿が生まれている。

○子どもの気付きや発見を引き出し、面白いことやアイデアを自分の遊びに取り入れる子どもの姿。

○様々な発想の中で遊びを創り出していく子どもに対して、新たな気付きを認識できる教師の姿。また、物の特質や特性と教材を結び付けて新たな発見をしている子どもに共感する姿。

○連続する子どもの新たな発見に共感していく教師の姿勢。

今後も、子ども一人一人の学びを最大限に引き出すことを大切にして実践を重ねていきたい。

令和2･3･4年度 土岐市教育委員会研究指定 駄知中学校区 「課題解決指定」

研究主題：個が育ち、集団が高まる学級経営

1　研究主題設定の理由

研究を始めるにあたり、駄知中学校区の児童生徒の実態として以下のような点があることに着目した。

【よさ】
・見通しがもてると、目標に向かって最後まで粘り強く取り組むことができる。
・授業や常時活動の中で、仲間とともに活動することができる。

【課題】
・自己肯定感が低く、多数の意見に流されやすい。
・自分の考えや思いを伝えることに苦手意識がある。

そこで、課題である「自己肯定感の低さ」を高めていくような活動を仕組んでいくこと、よさである「仲間とともに活動できる」ことを活かして、さらに「社会性の向上」を目指していくことが大切であると考え、目指す児童生徒の姿を次のように具体化した。

【駄知中学校区のめざす児童生徒の姿】
・自分の考えをもち、集団のために進んで役立とうとする姿（自己肯定感の高まり）
・互いの考えや思いの違いを認め合い、お互いを思いやって活動できる姿（社会性の高まり）

さらに、授業の中で目指していく姿を明確にした。

【授業の中でめざす児童生徒の姿】
・自分の考えを伝えられる姿→自己肯定感の高まり
「個が育つ」
・多様な考えを認め合える姿→社会性の高まり
「集団が高まる」

これらの姿は仲間との関わりを通して培われるものであると考え、駄知中学校区の研究主題を、「学級経営」とした。仲間との関わりの中で、一人一人の自己肯定感を高めながら、お互いのよさを大切にできる集団に高めていくことができる学級経営を目指した。

2　研究主題

個が育ち、集団が高まる学級経営

「個が育つ」とは、多様な他者と協働する中で、他者理解を通して自己理解を深め、自分のよさに気付き、自分の考えを表現できる姿と捉えた。**「集団が高まる」**とは、主体的な対話を通して、お互いの考えのよさを認め合いながら、集団や自己の課題を解決する姿と捉えた。

学校生活において、常に 「個」と「集団」を意識した学級経営を行うことが、駄知中学校区の児童生徒の抱える課題解決につながると考え、本研究を推進した。

3　研究仮説

互いの考えや思いを知り、よさを認め合う活動を工夫して自己理解が深まれば、主体的に仲間と関わり合える集団に高めることができる。

4　研究内容

研究内容1　児童生徒の実態把握
研究内容2　個を育てるための指導の工夫
研究内容3　集団を高めるための指導の工夫

5　研究実践

実践１　小６：学級活動「駄知小学校の伝統のそうじをもっと高めていこう」

ねらい

これまでの自分や学級の掃除に対する取り組みを振り返り、やれていることともっと努力できることがあることに気付き、６年生として「伝統」を高めていくために学級としての課題と個人としての課題を踏まえて、グループで具体的な取組方法を考えることができる。

研究内容１　見通しをもち、仲間と願いを共有した生活を送るための工夫

６年生の『学級活動』年間指導計画には、この時期、意図的に「掃除の仕方」を位置付けている。駄知小の5つの伝統である掃除について、これまでの学級や自分の姿を見つめ直し、これから自分たちがやるべきことを考えることで、駄知小のリーダーとして集団生活にどう貢献していくかについて主体的に考えることができた。

研究内容２　自分のよさに気付くために指導の工夫

ある児童が、「小さい声ならいいやと思って、ついしゃべってしまう。」と語る姿を、担任が「そういうちょっとした気持ちを出し合うといいよ。」と

価値付けたことで、他の児童も自分のちょっとした心の甘えが課題につながっていることに気付き、学級全体が本音で学級の課題に向き合うことができた。振り返り活動では、行動だけではなく、気持ちの変化を言語化させたことで、自己の成長を実感させることができた。

研究内容３　仲間とのかかわりに気付き、仲間のよさを生かすための授業の工夫

掃除の現状と課題を話し合った後、中学校の掃除の様子を第２資料として提示した。普段同じ仲間と同じ場所で掃除をしていると気付けないことも、先輩たちの姿を見ることによって新たな学びがあり、その後の意見交流では一人一人の考えがより広がった。

実践２　中３：学級活動「後期係活動の振り返り」

ねらい

仲間のよさを共有し、仲間の思いや働き方の工夫を知る活動を通して、学級の誇りに気付き、学級文化としてさらに向上させるために自分ができる目標を明確に決めることができる。

研究内容１　実態調査の実施と活用の工夫

事前にアンケートを実施し、結果をグラフで示した。前回と比べ仲間と協力できていることを実感することができた半面、全員が自分から働きかけているわけではないという学級の弱さにも目を向けることができた。

研究内容２　一人一人が存在感を実感できる指導の工夫

仲間のよさを出し合う場面では、常時活動で係として働きかけている仲間に対して、係ではない仲間が進んで手伝う姿をよさとして紹介した。こうした場面を意図的に作ることによって、自分は学級に貢献できていると実感することができた。また、各教科担任から見た学級のよさを聞き紹介した。客観的な価値付けが、自己肯定感の高まりにつながった。

研究内容３　対話的で深い学びのできる授業の工夫

授業の後半、司会を担任に交代し、学級の弱さをよさに変えるためにどうするとよいかや、学級の誇りについて班で交流する場を位置付けた。交流を通して、残りの中学校生活で学級目標を達成するために、一人一人がやりきる行動目標を決めることができた。

６　研究の成果と課題

(1) 成果

① 「個が育つ」

毎月実施しているアンケート結果から、「自分にはよいところがあると思う」と答える児童生徒の割合が向上した。（R3とR4の比較）

小学校：44.0% ➡ 53.9%（＋ 9.9ポイント）	
中学校：35.3% ➡ 47.1%（＋11.8ポイント）	

また、よいところだけではなく、自分や学級の弱さを語ることができる姿が増えてきた。仲間との信頼関係がないとできないことである。また、自己肯定感が高まったからこそできる発言だと考える。

② 「集団が高まる」

「人が困っているときは進んで助けている」と答えた児童生徒の割合が増加した。

小学校：53．8% ➡ 58．9%（＋5．1ポイント）	
中学校：69．5% ➡ 76．0%（＋6．5ポイント）	

学級内で話し合いをするとき、これまでより仲間の意見を聞き入れ、多数決で決めたり対立したりするのではなく、合意形成していく方法を学ぶことができた。また、縦割り遊びや異学年交流などの際に、他学年の気持ちを知ろうと、インタビューをしたり、アンケートを取ったりするなど、他者理解を深めようとする姿が増えた。このように縦のつながりも深まった。

(2) 課題

小中とも「個が育つ」点について、課題が残った。

小学校　自分の考えを相手に伝える力が十分ついたとは言い切れない。

中学校　主体的な行動を全校生徒ができているとは言い切れない。

７　今後に向けて

3年間の研究実践を通して、学級経営がすべての教育活動の基盤になっていることを実感した。研究を通して見えてきた成果と課題を基に、今後も学級経営の取組を継続していきたいと考える。また、今回初めて小中の連携を行ったことにより、小学校は中学校を見据え、中学校は小学校の積み上げを見届けることができた。

今後も、小中合同研推をはじめとして、授業交流や、学級経営の土台となる担当者の連携、そして、地域との連携を進めていきたいと考える。

西陵中学校区「課題解決指定」後の一年間の歩みについて

下石小学校 教頭　中嶋 聡子

1 はじめに

令和３年度研究発表会の座談会で、西陵中学校区は、３校の教職員でグループを作り、自分たちの取組を振り返りました。その振り返りの中から、以下の４点について令和４年度の重点として取り組んできました。

2 令和4年度の重点

(1) 継続して同じ学習規律で指導を行う

小学校２校は、継続して同じ学習規律で指導を行うことを大切にしてきました。中学校も小学校の学習規律を理解し、更に発展させました。

教室前面や机の上も整理し、授業に集中できる環境作りも行っています。私たちは、小中９年間の学びを意識した指導を行っています。

(2) 聞く力の育成・少人数交流・終末での見届けを研究の中心におく

少人数交流を「理解を助ける場」または「理解を深める場」として意図的に位置付け、実践しています。自分の考えをペアやグループの仲間に説明することで理解を促し、学力の定着を図っています。聞く力は学びの土台作りとして、小学校２校でこだわって指導を続けています。終末の見届けでは、本時、身に付けさせたい力を単位時間で全ての児童生徒に身に付けさせることができたかを、日常の授業でも見届けを確実に行い、指導しきることを目指して実践しています。

(3) 3校の全校研究会に教諭が参加する

これまで、研推長が３校の全校研究会で互いの学校の授業を見合ってきましたが、令和４年度からは、担任をもつ教諭が自分の専門教科の授業を中心に、各校の全校研究会に参加するようにしました。お互いの研究授業に参加することによって、各学校の研究のよさを学んでいます。よさを自校の教職員に広げていくための伝達が課題です。

(4) 家庭学習の定着・充実を図る

４月には、家庭学習の定着を図るため「家庭学習定着週間」を行い、期日を守って宿題を出すところまで指導し、見届けました。６・10・２月の「家庭学習がんばり週間」では、「自分のためになる」家庭学習に取り組ませています。令和４年度は、ＰＴＡ家庭教育学級とも連携し、家庭教育学級長から保護者の方に協力を求め、取り組んでいます。

西陵中学校区では、毎月「園長・校長会」が行われています。その中で、幼稚園にも「家庭学習がんばり週間」の取組の様子を伝え、園でも「家庭教育週間」と位置付け、各家庭でテレビやゲームをやめて親子で読書や会話をする取組を始めています。

3 令和4年度からの新たな連携

(1) ３校合同警報時引き渡し訓練

各学校がそれぞれで実施するよりも、実際の警報発令時または災害時の保護者の動きがイメージできました。次回は、こども園や幼稚園も一緒にできないかと考えています。

(2) 青少年育成町民会議

町の枠組みを超えて、西陵中学校区で、生徒のボランティアにより運営されました。中学生の働きぶりを妻木小や下石小の児童が見ながら参加したことは、研究にとどまらず、西陵中学校区の連携のパイプを地域とともに太く確かなものにしました。

(3) 図書館教育の充実

西陵中学校区に一人の図書支援員さんが勤務され、魅力的な図書館運営がされています。中学校の蔵書を小学校に貸し出したり、３校で東濃図書館審査にエントリーしたりしています。

西陵中学校では、１年生の図書貸し出し冊数が他学年の３倍になっているそうです。小学校を卒業した生徒が、中学校で読書に進んで取り組んでいる姿が現れてきています。

4 おわりに

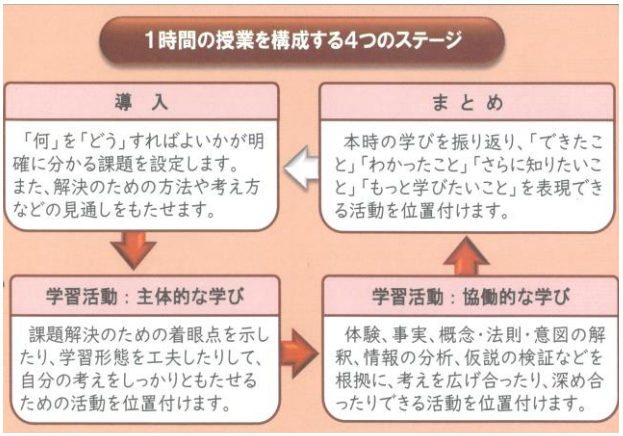
研究を通して得た３校の結びつきを、今後も大切にできることを継続して取り組んでいきます。

小中学校の学力向上推進　～学校訪問を通して～

学力向上推進リーダー　中村　勝（泉小学校 教頭）
教育研究所　主任　安藤 律子

教育長訪問に同行させていただき、各校の研究および授業の様子を紙面に起こして紹介させていただく**「小中学校の学力向上推進 ～ 学校訪問を通して ～」**も、本稿でいよいよ最終回となりました。今回は２校です。

さて、今年度の土岐市スタンダード授業は、以前にも紹介しましたが以下の通りです。（図１）



【図１ 今年度の「土岐市スタンダード授業」再掲】

各学校の研究主題や内容は違いますが、「子どもに学力を付けたい」という思いは、どの学校・どの先生も同じであり、共通理解・共通行動のもと、研究が進められていることが実感できました。これこそが土岐市の強みです。

この強みが、私たちの自信や誇りとなり、「子どもたちの学力向上につながる」と信じています。

他校の実践が各学校の研究を見直すきっかけとなり、改善を加えながら新たな実践へとつながっていく。そしてその実践が他校へと広まっていく…これが本稿の役目だととらえています。先生方にご一読いただき、ご自身の実践を振り返る機会にしていただければと考えます。

また、それが紹介させていただいた各学校への恩返しになることを願ってやみません。

【西陵中学校　１１／２】

【研究主題】
明確な出口に向かって、思考力・判断力・表現を伸ばしていく生徒
【研究内容１】
指導計画の作成と工夫
①単元・単位時間における付けたい力（知識・技能、思考・判断・表現力）の明確化
②各教科に研究構想の作成（教科の特性に応じた学び方や協同的な学習のあり方）
③付けたい力を身に付けるための指導計画の作成・見直し
【研究内容２】
授業改善
①協同的な学習における思考・判断・技能・表現を支え伸ばす指導方法や教材の開発
②自らの学びを振り返る評価（メタ認知）の工夫
③協同的な学習を成立させるための学習集団形成の工夫

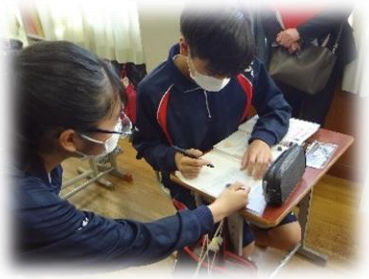
西陵中学校では、ＮＲＴや全国学力・学習状況調査の結果から、学校課題を**「表現力」**とし、「書く活動」を大切にされていました。今後は「伝える力」を含め、表現力の高まりを目指すべく、

1 基礎学力の定着　2 協同学習　に焦点を当てています。

特に1では**「家庭学習」**と**「出口の分かる授業づくり」**、2では**「グループでの学習」**に力を入れて指導していくとのことです。

上記の内容1は【研究内容 1】と、2は【研究内容２】と密接にかかわっています。研究内容１は「個」、研究内容２は「協同」、つまり「個」と「協同」の相関を通して指導していくことを大切にしてみえます。

このように、関連性を重視した研究の進め方は、大いに学ぶべきところがあります。



【泉小学校　１１／２１】

【研究主題】
追究する子
ー「できた」「わかった」を実感する児童の育成ー

【研究内容１】
「やってみたい」を引き出す課題づくり
・終末の姿のイメージや解決までの見通しをもてる課題提示のあり方
【研究内容２】
「できた」「わかった」につながる協働的な学びの設定
①子ども自ら学びを調整できる学び方
～「いつ、何を使って、だれと、どのように」を自ら選択する学び方～
②子どもの考え方を広げたり、深めたりして課題解決に向かう支援のあり方
【研究内容３】
「できた」「分かった」を実感できる終末の工夫
・課題に対する自身の取り組みを振り返る場や学んだことを使って定着を図る場の位置付け

泉小学校の指導案には、終末の姿が子どもの言葉で具体的に書かれています。また、【研究内容１】の課題づくりに関わり、興味を引き付ける課題提示の工夫も明記されていました。スタンダード授業の２つの重点が研究内容とつながり、意識されていると感じました。

終末の姿が明確になると、課題も必然性のあるものになり、解決までの見通しをもち活動に向かうことができます。子どもたちが「できた」「分かった」を実感するためには、一単位時間で何ができたらよいか、出口の姿（ねらい）を教師が明確に描くことが大切だと改めて感じました。

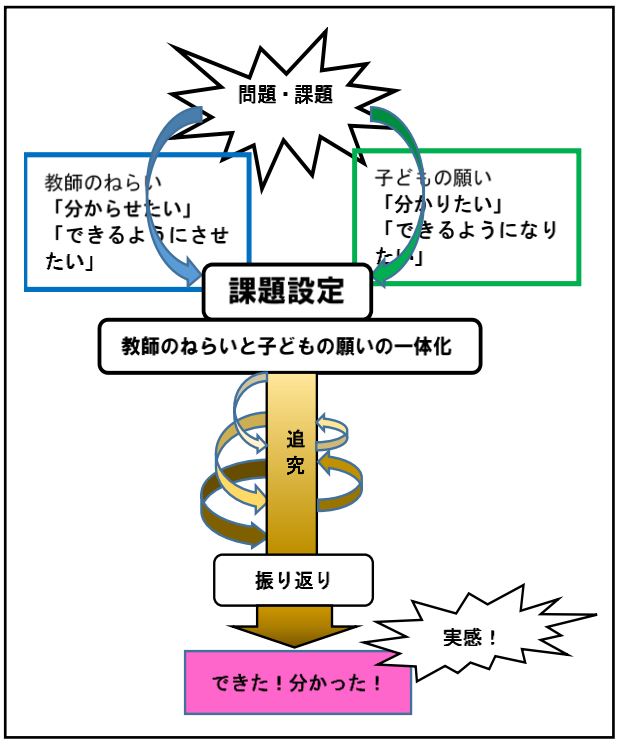
算数の授業では、ロイロノートに考えをまとめた子どもたちから「仲間に説明したい。」という声が上がりました。仲間と交流しながら考えを確かなものにして、『できたことを実感できる学び』につながる姿でした。音楽の授業では終末で振り返る時、教師が問い返すことで、できたことの中身を詳しく話す姿がありました。

また国語では、話合いをしている様子をタブレットで録音し、客観的に振り返る場を設定するなど、出口の姿に向かうために、何ができたかを実感できる手立てが工夫されていました。

【各学校の訪問を通して】

教育長訪問に同行させていただき、各校の先生方が、日々研究主題の具現化に向け、「土岐市スタンダード授業」や、今年度の土岐市全体の指導の重点である　<u>①「やってみたい」を生み出す具体的な課題　②「できた」「わかった」を実感する終末の振り返り</u>を、各校の研究主題とかかわらせて進めていることが分かりました。

今年度は、年度当初の学力向上推進会議において、一単位時間の時間の流れの以下のように提案しました。（図２）



【（図２）１単位時間で目指す学習の流れ】

『課題提示』に目を輝かせ、一人であるいは仲間と『追究』をし、『振り返り』で「できた」「わかった」を実感する　という上記のような授業をたくさん見ることができました。ねらい(何ができたらよいか)をもとに、「課題」➡「学習活動」➡「振り返り」が貫かれていることで、子どもたちが学びを実感する姿に表れてきていると感じました。

各学校では、研究の振り返りをしている時期だと思います。今年度の研究実践をもとに、今後の授業改善に向けて、今一度子どもたちの姿から見つめ直し、全職員で共有しながら実践を積み重ねていただきたいです。

【学力向上推進委員会の取り組みから】

令和４年度　肥田中学校の実践報告

学力向上企画委員　肥田中学校　澤田　直樹

肥田中学校では、次年度の校区連携発表に向け、以下の３つの視点で研究を進めている。

１．見通しや課題意識をもつための工夫
２．仲間と考えを広げ深める対話的な活動の工夫
３．学びを自覚し、よりよい自分を実感できる終末の工夫

ここでは、土岐市スタンダード授業の重点項目に関わる１と３の実践について述べる。

１　「やってみたい」を生み出す具体的な課題

まず、教師が「本時何が出来ればよいのか」を一言で言えるようにした。そして、導入時の資料・問題・実験などを用いて、それを生徒と共有すること。「どのようにすればできそうか」という見通しを生徒がもてるように、単位時間の授業の進め方の工夫を行った。

第１学年　数学　量の変化と比例、反比例
「反比例のグラフ」

数学科の授業では、わからなかったときは、「教科書で調べる」「前の授業に立ち返る」「仲間や先生にヒントをもらう」、わかった時は、「教科書と比べて確かめる」「仲間と確かめ合う」ということを繰り返し指導した。反比例のグラフの特徴をとらえる授業では、見つけたグラフの特徴を、比例の時の学習に立ち返りながらより数学的な表現に近い言葉で特徴をまとめられるように追究する姿が生まれた。

２　「できた」「わかった」を実感する終末の振り返り

授業の終末では、問題を解いたり、文章でまとめを作成したりするなど、各教科の特性に応じた振り返りの方法を考えて、授業の終末に位置付けた。また、その振り返りでどんな気付きをきっかけとして、何ができるようになったかを生徒が自覚できるようにすることを目指した。

第１学年　国語　今に生きる言葉
「故事成語を使って体験文をつくろう」

国語科の授業では、故事成語を使って書いた体験文を互いに推敲し合う授業の終末に、「どんなアドバイスでどのように推敲したのか、そのことで伝わり方はどのように変化したか」という視点を設けて振り返りを行った。このように具体的に振り返る視点を設けたことにより、生徒Ａは「見た目が少し物足りなかった」という表現を「見た目が少し地味だった」という表現に推敲したことで、色が物足りないというニュアンスまで含んでいる表現に改善されたことを振り返ることができた。

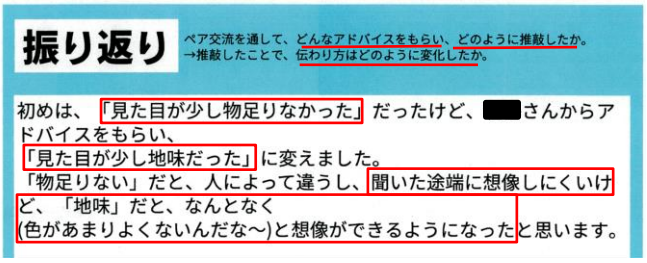


図１　生徒Ａの振り返り

３　今後の実践に向けて

ねらい・課題・振り返りが一貫した授業を行うことができた。また、それに到達するために、学習内容や方法とその過程を見届ける手段について工夫が見られた。

今後は、対話的な活動の目的を教師が明らかにして活動を仕組み、さらに学びを深めていけるように研究を進めていきたい。

「心にひびく言葉」

「一つひとつ済ませば、心は澄んでいく」

肥田小学校 教頭　後藤　弘行

『仕事でも生活でも、人生は絶え間なく何かを片づけることの積み重ねによってできている。』

上記の言葉は、桜井章一氏の著書「勝とうとするな　負けの99%は自滅である」の一節です。

私たち教職員は、教育目標の具現に向けて絶え間なく業務に取り組んでいます。仕事を片付け、人との約束を片付け、片付けることが日々山積しています。一つひとつ片付けなければ、「まだできていませんか」と要求され、心に負担が蓄積し、自他によくない影響を与えることになりかねません。桜井氏は次のように続けています。

『片づけは、さっさと間に合う形で済ますことが大切だ。間に合わないことは「間抜け」になるから、間に合うように片づける。物ごとを片づけて済ませば、心は「澄む」。心が澄めば、いろいろなことへの気づきが増える。』

仕事でも生活でも、先を見て行動するか、できていないことに追われ、できない言い訳を考えて行動するか。言い訳を考え、間に合っていない自分を正当化しようとしているのであれば、仕事でも生活でも、よい機会を逸していくのではないでしょうか。視野を広げ、先を見通し、毎日の仕事と生活に起こる様々なことを一つ一つ丁寧に実行することができる資質・能力を身に付けることが肝要なのではないかと思うのです。

【(株)ロイロ認定　「ロイロノート認定ティーチャー」を目指しませんか】

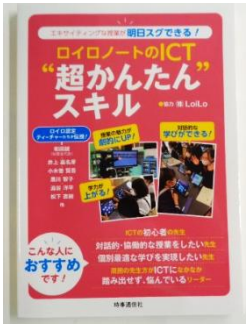
LEG（LoiLo Educator Group）岐阜主催の研修会にて、ICT 推進教師の先生を中心に次の方が認定されました。（11/23 開催）

瀬戸口 貴光 先生（妻木小）	柳原 伸哉 教頭先生（駄知小）
小倉　信 先生（駄知中）	山田 陸生 先生（駄知中）
野田 大貴 先生（肥田中）	阿部 聖一 先生（泉中）
脇田 泰教 先生（泉中）	片山 侑希 先生（泉中）
小野木 学 先生（下石小）	

（※小野木先生は独自で研修し、ロイロに授業デザインを申請して被認定）

＊LEG とは、地域での ICT 利用促進のために、地域ごとの教育者グループをロイロが認定し支援する制度です。

＊研修会では、児童生徒が主体的に学習する授業、思考力・判断力・表現力の育成を目指した授業デザインについて、具体的な授業場面をイメージして研修しました。



教頭先生を通して、各校に「ロイロノートのＩＣＴ“超かんたん”スキル」が配付されています。表紙には『ロイロ認定ティーチャーたちが伝授』と謳われています。

例えば、学年で輪読して実践に移してみるなど、各校でご活用ください。

研究所にも１冊あります。必要ならばご連絡ください。（申し出順に貸し出し）

【お知らせ：教育ときの HP 掲載が、既刊号も含めて研究所の HP から土岐市の HP に移行されています。**】**

編集後記

新春の箱根駅伝で優勝した駒澤大学 大八木監督の言葉。「昔は一方通行。今では通じないからコミュニケーション。私だけで決めるのではなくて、選手にも考えさせながら実行する。疑問をもたせることの大切さをテーマにやっている。」評論家の方からは「『内発的な動機付け』に指導転換。」という言葉もありました。本号は、どの頁も、子どもたちや教職員の内発的な動機付けをするための学校・園の経営の仕組みや考え方が示されているようです。新年の抱負が具現していくように、内発的な動機付けを講じていきたいものです。